

平成十七年度 駒澤短期大学仏教科彙報

◇平成十六年度 短大仏教科開講科目

基礎仏教学

木村 誠司

『般若心経』をテキストとし、前期は様々な角度から考察を加えた。注釈書を用い、特に空海の『般若心経秘鍵』を参照した。

宗学研究

角田 泰隆

前期は、曹洞宗の基本的事柄について概説、後期は、両祖(道元禪師・瑩山禪師)の伝記をたどりながら、その基本的な教義について講義。

禅学研究

奥野 光賢

禅学特有の用語の解説を中心としながら、慧能に至るまでの中国禅宗史を概説。その上で、『六祖壇経』を講読して、禅思想の思想的意味について考察した。

仏典研究Ⅰ

木村 誠司

袴谷憲昭『仏教入門』を中心とし、インド・

チベット仏教について考察した。

仏典研究Ⅱ

石井 公成

コンピュータ教場において語法に注意しつつ初期仏教の漢訳を講読。

仏典研究Ⅲ

袴谷 憲昭

源信『大乘対俱舍抄』の講読を、日本における仏教思想の展開を検討していくという大きな目標の一環としておこなっている。講読ではあるが、平成十六年度には、『界品』第十八頌より第二十二頌までの「対本頌弁義」を講読した。

宗学演習

角田 泰隆

『正法眼蔵』「発菩提心」巻を研究した。前期は、図書館にて研究ノートの作成。後期は、その成果を発表してもらい、演習形式で講読。

仏教思想演習

袴谷 憲昭

この演習では、目下、安然『真言宗教時義』

を講読中であるが、平成十六年度は、第二十五問答より第二十八問答へ移る間に、たまたまサンズクリット原典が刊行されることになった『維摩経』を、『真言宗教時義』

の重要な典拠の一つとして、原典と比較しながら、経文の数十箇所吟味検討の方に大半の時間を費やすことになった。

中国仏教演習

奥野 光賢

凝然『八宗綱要』をテキストとして、仏教の歴史と教理を演習形式で概説。昨年度は『三論宗』の項の講読。その際、古蔵の『三論玄義』『中観論疏』等に見られる重要な記述もあわせて講読した。

インド・チベット仏教演習

木村 誠司

頭教に関するツォンカパの見解を考察した。前期は中観、後期は唯識を扱った。

仏教文学演習

石井 公成

『源氏物語』『万葉集』などを引用仏典に注意しつつ講読。

禅籍講読

角田 泰隆

道元禪師の『学道用心集』を講義。

日用經典概説

奥野 光賢

前期は仏教教理史を概説しながら主要な大乘経典に対する解説。後期は曹洞宗において日頃読誦している経典(教典)・語録等を概説。主として『修証義』『発願利生』を中心に扱った。

仏教伝道 角田 泰隆

前期は、釈尊の伝記を学びながら仏教伝道の基本的あり方について考え、後期は、宗門寺院における伝道の具体相、特に葬祭儀礼について、その意義を概説。

中国仏教史 奥野 光賢

中国仏教の形成過程を主として教理に力点をおいて概説。教科書として鎌田茂雄『新中国仏教史』(大東出版社)を使用した。

日本仏教史 袴谷 憲昭

末本文美士『日本仏教史』(新潮文庫)を教科書とし、これを中心に、仏教伝来より近世初期までの日本仏教史の展開を概観した。

日本禅宗史 石井 公成

禅のマイナス面にも注目しつつ、奈良時代から現代までの禅を概説。

仏教と文化 木村 誠司

『チベットの死者の書』に関する文化的・思想的影響について考察した。

外国語仏書演習 袴谷 憲昭

Takasaki Jikido. (tr. by Rolf Giebel). An Introduction to Buddhism, Tokyo, 1987. の第十章をほぼ読了した。

坐禅 角田 泰隆

前半は只管打坐、後半は『正法眼蔵』『坐禅儀』と『普勸坐禅儀』の提唱。

〔全学共通科目〕

仏教と人間(短大仏教科) 角田 泰隆

前期は、宗教の概念および世界の宗教について概説し、後期は仏教の基本的な教義について解説。

〔他学部開講科目〕

〔大学院〕

修士課程・仏教学特講Ⅱ 石井 公成

仏教色の強い中国・日本の漢詩を講読。

〔仏教学部〕

朝鮮仏教史 石井 公成

『三国異事』や禅文献を主な材料としつつ古代から現代までの仏教を概説。

坐禅Ⅰ 角田 泰隆

前半は只管打坐、後半は坐禅に関する両祖の撰述の提唱。

日本仏教文化史 袴谷 憲昭

序 … 仏教東漸—半跏思惟像

第一章…「玉虫厨子」と捨身供養

第二章…「往生要集」と地獄極楽

第三章…「一言芳談」と後世物語

第四章…「日本史」における仏教

第五章…「新論」の国体論と仏教

結 … 仏教西来—靖国問題考

ほぼ右のようなテーマについて講義した。

元来は「在家菩薩」であるはずの「半跏思惟」像の形体に象徴される仏教徒の信仰対象は、必ず「仏」になることを約束されている。「苦行者」たる「出家菩薩」である。その「出家菩薩」の姿を描いたものが「玉虫厨子」であるが、その「捨身」の靈魂觀を、「菩提心」を中心に、「一念三千」の教義などを踏まえながら、「靖国問題」の「英霊」

にまで言い及んだ。その傍らで仏教とキリスト教における靈魂観の違いを、フロイスの『日本史』やハビアンズの『妙貞問答』などを資料として論じ、明治以降の近代法のもとでの「自業自得」や「自己責任」の用法上の問題点にも触れた。

仏教特講Ⅳ

奥野 光賢

最初に如来藏・仏性思想に対する研究史を主として高崎直道博士の研究を紹介しながら概説。それを踏まえて『大般涅槃経』『梵行品』を講読しつつ、その思想的意味を考察した。

〔短期大学〕

仏教と人間（国文科前半）

奥野 光賢

松本史朗著『仏教への道』（東京書籍）を教科書として、仏教の基本的教義を概説しつつ、仏教の人間観について考察した。

仏教と人間（国文科後半）

木村 誠司

前期は仏教の基本的知識を学び、後期は日本文学における仏教の影響を考察した。

仏教と人間（英文科前半）

石井 公成

世界の主要な宗教、および仏教の教理と歴史

史について概説。

仏教と人間（英文科後半）

袴谷 憲昭

拙著『仏教入門』を教科書として、我が国に定着してしまっただかに見える非仏教な考え方を反省しながら、仏教の基本的思想について説明した。

◇教員研究活動

石井 公成

〔論文〕

「中国禅の形成（『思想』二〇〇四年四月号、岩波書店、二〇〇四・四）

「暖味好みの源流―『伊勢物語』と仏教―」

（『文学』二〇〇四年九月・十月号、岩波書店、二〇〇四・九）

「宗教者の戦争責任―市川白弦その人の検証を通じて―」（『岩波講座 宗教 8 暴力―破壊と秩序』岩波書店、二〇〇四・九）

「漢詩から和歌へ（一）―良岑安世・僧正遍照・素性法師―」（『駒澤短期大学仏教論集』第十号、二〇〇四・十）

「無常と忠君と恋をつなぐもの―曹植の漢

詩と『万葉集』の長歌―」（『駒澤短期大学紀要』第三十三号、二〇〇五・三）

「『紫式部日記』と『源氏物語』における『維摩経』利用」（『駒澤大学仏教文学研究』第八号、二〇〇五・三）

「『源氏物語』を読むための仏教通史」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』39「早蕨」、至文堂、二〇〇五・四）

「思想基盤としての仏教―女の宿世と親の因果―」（同右）

〔データベース〕

「『源氏物語』 仏教関連表現データベース

（β版）」（鈴木裕子教授との共著。平成十六年度駒澤大学特別研究助成成果報告、二〇〇五・二）

〔シンポジウム〕

「シンポジウム『家族のあり方と仏教』（石井公成・小宮信夫・藤見純子、『日本仏教学会年報』第六十九号、二〇〇四・五）

〔書評〕

「柳田聖山著『臨濟録』（『禅文化』第一九三号、二〇〇四・七）

〔末本文美士「明治思想家論(近代日本の思想・再考Ⅰ)」〕近代日本と仏教(近代日本の思想・再考Ⅱ)〔「宗教学研究」第三四四号、二〇〇五・六〕

〔発表〕

〔Huayan Philosophy and Nationalism in Modern Japan〕(Kegon/Huayan Conference in Budapest)『ブダペスト』二〇〇四年五月三十日)

〔Synthesis of Huayan and Chan in Uisang's School〕(International Conference: Korean Buddhism in East Asian Perspectives) 韓国金剛大学校、二〇〇四年十月二十四日)

〔近代の日本・中国・韓国における「大乘起信論」の研究動向〕(比較仏教文化化学術研討会、大阪仏光山寺、二〇〇四年十一月二十七日)

〔辛亥革命前夜における華嚴思想と無政府主義 章太炎と劉師培の場合〕(第十九回国際宗教学宗教史会議世界大会、東京、二〇〇五年三月三十日)

〔公開講座〕平成十七年度駒澤大学春季公

開講座「近代日本の仏教をめぐる…日本から東洋・西洋へ―渡航者たち・相互影響・すれ違い―」(於駒澤大学中央講堂)

木村 誠司

〔論文〕

「ツォンカパの自相説について(一)」〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

「ツォンカパのバーヴィヴェーカー理解」〔駒澤短期大学研究紀要〕第三十三号、二〇〇五・三)

〔発表〕

「ツォンカパと祈り」(日本仏教学会平成十六年度学術大会、二〇〇四年九月十七日、於龍谷大学)

角田 泰隆

〔監修〕

「知っておきたい曹洞宗」(日本文芸社、二〇〇四・十二)

〔論文〕

〔道元禪師の修道論―特に「正法眼藏隨問記」に見られる学道の用心について―〕

〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

〔宗典の読み方〕〔宗学研究〕第四七号、二〇〇五・三)

〔戒と僧の現状と提言〕(仏教タイムズ社

『現代戒想』所収、二〇〇四・五)

〔発表〕

〔宗典の読み方〕(第五十回宗学大会、二〇〇四年十月二十八日、於駒澤大学)

袴谷 憲昭

〔論文〕

〔道世「法苑珠林」の「福田」文献〕〔駒澤短期大学研究紀要〕第三十二号、二〇〇四・三)

〔仏教思想論争考〕〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

〔戦争の時代―日本文化礼賛者の系譜―〕〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

「新刊補記」〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

「無性の文証の確認」〔駒澤短期大学研究紀要〕第三十三号、二〇〇五・三)

「出家菩薩と在家菩薩」〔村中祐生先生古稀記念論文集「大乘仏教思想の研究」、同行会、山喜房仏書林、二〇〇五・六)

奥野 光賢

〔論文〕

「鎌倉期三論宗における「仏性縁起」解釈について」〔駒澤短期大学仏教論集〕第十号、二〇〇四・十)

「古蔵の法華経観」〔駒澤短期大学研究紀要〕三十三号、二〇〇五・三)

〔発表〕

「古蔵の法華経観」(第六回国際法華経学会、二〇〇四年八月六〜八日、於カナダ・トロント大学)

〔出張〕

日本仏教学会平成十六年度学術大会(二〇〇四年九月十八日、於龍谷大学)

第三回ケレート・ブッダシンポジウム(二〇〇四年十二月十八、十九日、於東大寺金鐘会館)

〔公開講座〕平成十六年度駒澤大学秋季公開講座「三蔵法師の世界―鳩摩羅什―」(於駒澤大学中央講堂)

〔公開講演会〕

二〇〇四年十一月十七日 午後六時
演題 袴谷・松本両氏の仏教理解に対する若干の異議申し立て

講師 龍谷大学教授 桂 紹隆先生

◇研究テーマ提出者(平成十七年度)

仏教科一年

寺島 良純 「業論の考察」

清水 喜久子 「法華経の菩薩行―法師について」

川崎 一之 「禅と心」

三吉 瑛輝 「曹洞宗の両祖の生涯」

梅本 晃代 「女性と仏教―最初の出家者善信尼について」

吉岡 見純 「『修証義』による教化」

杉本 佳哉 「道元禪師の坐禅」

高橋 昭夫 「曹洞宗の宗義と歴史」

吉村 綾輔 「仏教とは何か」

田中 琢磨 「現代における仏教の存在意義」

玉井 宏忠 「中観思想に於ける縁起と自性の矛盾関係―二重構造の解体―」

松井 量孝 「道元禪師の学道観」

松本 好寛 「宗教学上における仏教の位置」

佐々木佳子 「仏教と人間生活のかわり方」

海老名孝和 「アンペードガルの仏教観」

長谷川恵子 「小乗仏教の世界」

金居 陽 「日本人の神社観」

石井 章仁 「曹洞宗における社会福祉の思想と歴史の変遷について」

の既成寺院離れと新興宗教」

飯田 勝洋 「現代生活慣習の内での教

え」

石龍 泰晃 「中国から日本への仏教伝来

―『阿毘曇五法経』について―」

清水 秀男 「仏教における平和思想と現

代」

萩原 智 「新興宗教が社会に与えた影

響」

大滝 雅宣 「宗教と教育」

◇平成十七年度短大仏教科在学生

仏教科一年

寺島 良淳

種子 知紀

鈴木 博仁

小野 裕幸

川崎 一之

三吉 瑛輝

梅本 晃代

岸 徹

清水喜久子

増澤 稔人

多田加代子

長田 肇

澤野 武夫

茂田 孔淳

吉岡 見純

小山田光樹

仏教科二年

佐々木佳子

長谷川恵子

濱 弘親

石井 章仁

月村 修

岡部 良行

相川 利正

吉野まどか

海老名孝和

小原 俊一

金居 陽

工藤 昌也

舟山 睦男

萩原 康平

泉 敬山

飯田 勝洋

中水 了

浜野 修雄

吉村 綾輔

田中 琢磨

鈴木 泰真

倉島 智行

奥山 良栄

乙川 裕太

松井 量孝

大村 豊伸

松本 好寛

渡邊 慧良

杉本 佳哉

高橋 昭夫

佐々木 誠

井橋 幸重

小柳 富

田中 悠琢

躑躅森 康

玉井 宏忠

飯尾 芳寛

竹内 祥雄

田口 正法

◇諸係担当(平成十六年度)

短期大学仏教科主任

○学内諸係

全学教授会委員

自己点検・評価委員

体育審議会委員

教員人事委員会委員

図書館委員

図書館選定委員

紀要編集委員

宗教教育運営委員

学園通信発行委員会委員

禅文化歴史博物館委員

石龍 泰晃

成田 紀久

萩原 智

村上 明宏

大塚 元晴

小林 泰輝

向 英信

中堀有希也

清水 秀男

大滝 雅宣

井上 翔太

川原 光雄

青柳 靖典

熊谷 晃生

木村 誠司

木村 誠司

石井 公成

奥野 光賢

石井 公成

石井 公成

石井 公成

石井 公成

奥野 光賢

袴谷 憲昭

奥野 光賢

○学科内諸係

自己点検・評価実施委員 専任教員全員

論集編集委員 石井 公成

会計・庶務 奥野 光賢